



Title	第二次大戦中のソ連のフィンランド政策：戦後への展望によせて (III)
Author(s)	百瀬, 宏
Citation	スラヴ研究, 23, 127-138
Issue Date	1979
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/5082">http://hdl.handle.net/2115/5082</a>
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000113047.pdf



[Instructions for use](#)

## 第二次大戦中のソ連のフィンランド政策

——戦後への展望に寄せて—— III

百 瀬 宏

### 問題の所在

- I フィンランド側の戦争目的
  - II ソ連の和平工作とフィンランド政府
    - (1) 1941-1942年
    - (2) 情勢の転換—1943年—
    - (3) 和平交渉への道—1944年—
- (以上20号)
- III 反政府和平派の動向
    - (1) 体制内和平派の運動
    - (2) パーシキヴィの動き
    - (3) 反体制和平派の活動

(以上21号)

結語にかえて—ソ連側諸文献の検討を兼ねて—

### 結語にかえて——ソ連側諸文献の検討を兼ねて——

此迄の叙述に明らかなように、本稿はまだ未定稿の段階にあり、そこで扱われている諸事実も今後の検討をまつべき点が少なくない。その意味では、本稿のテーマに関して正面から結論を出すことは時期尚早であると思われる。そこで、ここでは結びにかえる意味で、本文中にはこれまで論じていなかったソ連側の歴史記述をとりあげて検討し、稿を終えることとしたい。ソ連側の歴史記述を検討することが、史実の解明という意味ばかりでなく、それぞれの記述がなされた時点でのソ連の政治動向をおしはかる意味でも役立つ、という認識は、いまや一般化しているといつてよいであろう。しかし、たとえばソ連共産党史の叙述のうえで重点がおかれている諸事件の評価を検討するような場合とは異なって、本稿での作業はテーマに関連した記述をやや雑多な諸文献からとり出して論じることになることはお断りしておかなければならない。

第二次世界大戦中のソ連の対フィンランド関係に関するソ連側文献の記述は、さしあたり二系統に分けてとりあげることができると思われる。その一つは、フィンランドに関する概観的な出版物、ないしはソ連とフィンランドの関係を論じた出版物であり、いま一つは、国際政治史、ソ連外交史、第二次大戦史などの国際関係の歴史を扱った文献で、かつその中である程度当該テーマに触れているもの、である。いうまでもなく、こうした分類の中に含まれる諸文献は、それぞれに異なった企画のもとに出版されたものであり、一つの系統の中でもそれらを比較考量することが、ただちにソ連側の対フィンランド観の変遷を明らかにすると見るのは早計であろう。ただ、出版物の文字面に現われたかぎりにおいても、大戦中のフィンランドの動向に関してかなりの振巾をもって異なった解釈がソ連

側において存在してきたことが、明らかである。以下においては、限られた材料をもとにしてではあるが、暫定的に見取図を描いてみることにしたい。きわめて大まかではあるが、上記の分類を根拠づけているのは、前者の系統の文献が、二度にわたるフィンランドの対ソ戦争の原因ないし背景について主として論じているのにたいして、後者の系統の文献は、戦争の勃発、休戦工作、終戦の経緯を国際情勢全般の中で万遍なく扱っている、という相違であろう。そこで、それぞれの系統の文献について検討していくことにする。

まず、ソ連の対フィンランド関係に関する文献であるが、1957年にポポフなる著者によってフィンランドの社会・文化を概観した小冊子<sup>1)</sup>が刊行されている。この中でポポフは、「冬戦争」の勃発事情について次のように述べている。「1939年秋にソ連がレニングラードの安全保障をめざした交渉をフィンランドと開始した時、イギリス・フランス、またひそかにアメリカといった反動的グループに煽動されたフィンランド政府は、ソ連との条約締結を拒否した。……1939年11月26日にフィンランドによって挑発された国境事件は、外交関係の断絶と、1939年11月30日の戦闘開始に導いた」<sup>2)</sup>。この叙述は、それまでソ連で行なわれてきた説明の平均的なものといえるのであって、それが妥当であるか否かはともかく、明快な論理の運びのうえに成立している。そして、「継続戦争」の背景に関する説明もまた、同様の印象を与える叙述になっている。これは、以後の諸文献の叙述の傾向をみていくうえで一つの基準となるとも考えられるので、煩をいとわず引用することにしよう。「冬戦争」の終結と講和条約の成立について述べたあとで、ポポフは次のように書いている。

「フィンランドは、ソ連にたいするあらゆる攻撃をさし控え、ソ連に敵対する一切の同盟に加入しないことを義務づけられた。だが、それにもかかわらず、すでに1940年夏にフィンランドは、ヒトラー・ドイツと条約を結び、同年秋にはドイツ軍がフィンランドに到着しはじめ、1940-1941年の冬には、ドイツ軍から成る対ソ連戦争に参加するために『フィンランドSS』と称されるフィンランド人分子の編成が行なわれていた。フィンランドはオーランド諸島の再軍備を始めた。／フィンランドの支配層は、ソ連と結んだ条約にたいする自己の忠誠を誓う一方で、ソ連にたいする侵略戦争の準備を秘かに進めていた。反動的な政府のこのような行為は、フィンランド人民の憤激をひき起した。1940年春に、『平和・対ソ友好協会』を設立し、それは2-3カ月で約6万の会員を数える大衆組織に成長した。／フィンランド政府は、ヒトラーの援助を受けて、国内に残忍なファシスト・テロルを樹立した。1940年8-9月には、国の進歩的グループに攻撃を加えるために全警察力が動員された。とくに、『平和・対ソ友好協会』とその地方組織は弾圧を蒙った。フィンランドのブルジョワジーは新しい反ソ戦争を準備していた。／ソヴェト・カレリアのこの上なく豊かな森林地帯の強奪を目ざしていたフィンランド・ブルジョワジーの貪欲な食欲を満足させたいと望んで、フィンランド政府は『大フィンランド』の建設を夢みた。フィンランド・ブルジョワジーの楽な儲けをしようという願望とソ連にたいする憎悪は、フィンランドをソ連にたいするファシスト・ドイツの背信的な攻撃への参加に導いた」。

ここにも見られるのは、「フィンランドの支配層」が「冬戦争」の講和成立直後から、

1) Д. И. Попов. Финляндия (Москва, 1957).

2) Там же, стр. 64.

一貫してソ連にたいする敵対心を抱き、表面の言辞とは裏はらにナチス・ドイツと同盟を結び、対ソ戦争の準備を進めていた、という曖昧さの余地を残さない論理である。ところで、1966年になるとロズドロジヌイおよびフォードロフによる『フィンランド——わが北方の隣国——』と題する、これまた小冊子が現われた<sup>3)</sup>。この冊子は、同工異曲ではあるが、決定的な表現を避けている傾向がみられないでもない。まず「冬戦争」の背景については、ヨーロッパにおける戦争勃発の中でソヴェト政府がレニングラードの安全保障に関する具体的な問題をフィンランドにたいして提起したむねを述べたあとで、「しかし、ソヴェト政府の呼びかけは、フィンランドにおいては、ソ連にたいする不信と戦争気分の燃えあがりのための理由としてのみ利用された。事件の一層の発展がフィンランドとソ連の間の軍事的紛争の発生をもたらした」としている。ポポーフの著者と比較すると、こちらの方は英仏米の煽動という文言が見られず、また「国境事件」に関する明確な言及を欠いている点が注目される。

「継続戦争」の背景を扱った部分についても、同じような傾向が窺われる。ロズドロジヌイ・フォードロフによると、「冬戦争」の講和条約は両国の善隣関係発展のための好条件をつくり出したが、フィンランド政府はこれを活用しようとはせず、ソ連にたいし敵意ある政策をとるとともに西万列強の帝国主義者との関係をもてあそんでいた。タンネル・リュティ・マンネルヘイムといった指導者は、講和を息継ぎとみなし、対ソ戦争の復活を準備した。フィンランドとヒトラー・ドイツの政治的・経済的・軍事的接近がふたたび深められ、それは対ソ戦争にあたっての両国の同盟に導いた<sup>4)</sup>。ここでは、議論の基調はポポーフのそれと酷似しているが、しかし、ナチス・ドイツの支援を受けたファシスト・テロルの確立、といった極端な表現はここには見られず、ヒトラーの対ソ戦争への全面的な参加という印象はやや弱まっていると思われる。なお、ロズドロジヌイ・フォードロフは、「継続戦争」中およびその終結にまで筆をのぼし、「フィンランド人反動」や「ヒトラーの宣伝屋」の努力にもかかわらず、「継続戦争」開始後まもなく、フィンランドの労働者や進歩的層が戦争にたいする不満を示すにいたった、として、社会民主党の6人グループの活動やフィンランド共産党が「自国民の真の民族的利益」のために果した反ファシズムの指導的役割に言及し、さらに、1943年初めの反政府和平派の形成および同年末のケッコネンの言論活動についても述べている<sup>5)</sup>。そして、「ソヴェト軍の成功の結果、破滅寸前に運ばれたフィンランド政府は、ソ連政府との会談に着手した」<sup>6)</sup>。これらの叙述も、すでに見た「継続戦争」の背景に関する叙述が読者に与える印象と矛盾してはいない。

さて、1969年になると、ソ連研究者の手になるきわめて興味深いソ連・フィンランド関係に関する書物がフィンランドで刊行された。ポフリュプキンの手になる『敵としての、また友としてのフィンランド、1714-1967年』という著作<sup>7)</sup>がそれである。これは本来ロシア語で書かれたものをフィンランド語訳したものであるが、フィンランド語のもののみが出版された。このことは、元来ポフリュプキンの執筆の意図がフィンランド国民にたい

3) И. Роздорожный и В. Федоров, Финляндия—наш северный сосед (Москва, 1966).

4) Там же, стр. 34.

5) Там же, стр. 34-35.

6) Там же, стр. 36.

7) V. V. Pohlekin, *Suomi vihollisena ja ystäväinä 1714-1967* (Porvoo-Helsinki, 1969).

する語りかけにあり、ソ連国民にたいする啓蒙ではなかったことを物語るものであろう。事実その内容は、全篇ことごとくが、ロシアソ連とフィンランドの間に友好の可能性が存在したことの指摘、およびいかにその可能性がしばしば活用されなかったかを、ロシアソ連とフィンランドの間に友好の可能性が存在したことの指摘、およびいかにその可能性がしばしば活用されなかったかを、ロシアソ連の視点に立ちつつ、フィンランド国民に説明するところみに捧げられている。その点、この書物はあまりにも目的意識的であって、牽強附会の感をもよおさせる箇所が少なくない。しかし、本書が以上のような狙いをもっていることが、われわれの最大の関心事である「冬戦争」ならびに「継続戦争」を論じた部分に、注目すべき特色を生じさせることにもなったのではないかと、思われる。もちろん本書といえども、この両次の戦争の発生について責任を当時のフィンランド政府に負わせている点には変りはないのであるが、これまでにみたロズドロジヌイの著書とは格段に柔軟な物の見方がなされている。

まず、「冬戦争」勃発の背景に関する叙述を見ると、ポフリョプキンは、「要するに、ソ連の側は柔軟性を示した。フィンランド側については同じことはいえない」という文言を据えている<sup>8)</sup>。ポフリョプキンによると、フィンランド政府は軍事動員や国境への軍隊移動などの敵対的行動をなし、ソ連側が示した代案的な要求すらも拒否して、会談をみずから打切るにいたった。フィンランドの新聞は反ソ・キャンペーンを張り、国境事件がそれを補った。「ソ連の指導者には、フィンランド国内で、有利な国際情勢が到来すれば侵略戦争に訴えようとする勢力がついに優位を占めたことは明らかであった」（圏点——百瀬）。こうして、「平和を希望する余地は残されていなかった」。フィンランド政府は国境からの撤兵も拒否するといった態度に出た。「ソヴェト政府は、これ以上待つという態度はとらず」不侵略条約の失効宣言と外交官の引揚げを行ない、「つづく事件の発展が両国間の軍事紛争の発生に導いた」<sup>9)</sup>。以上のポフリョプキンの叙述は、国境事件への言及はともかくとして、フィンランド側には少なくとも当面は対ソ戦争に訴える意思はなかったことを明言しており、フィンランド政府の責任は「柔軟性」の欠如にあったと主張するものであって、フィンランド政府にいわば悪意を認めるようなポポーフやロズドロジヌイ-フォードロフの叙述と異なって、むしろその失策を非難する色合いの濃い論調になっている。ところで、フィンランド側についてこのような叙述をなすとすれば、当然のことながらソ連像もまたこれに対応した姿をもつことになる。元来「軍事紛争が発生した」といった、「冬戦争」が自然に発生したかのような表現は、これまで紹介した諸文献のいずれにも共通しているところである<sup>10)</sup>が、フィンランド側に当面对ソ戦争の意図がなかったとする言明は、フィンランド政府の戦争にたいする消極性を従来よりも浮上らせている。これを、ソ連側が平和の希望を失い、もはや「待つという態度はとら」なかったという表現とあわせ考えれば、ソ連がフィンランドにたいしていわば予防戦争を仕掛けた事実を、文脈上認めていることになるのではないであろうか。

ポフリョプキンによる「冬戦争」の背景に関する論述が、興味ある表現をしながらもフ

8) *Ibidem*, s. 307.

9) *Ibidem*, s. 308.

10) この表現は、さらに他の多くのソ連側文献にも共通して見られるところである。

フィンランドだけにたいする論難を行なう、といった性格のものであるのにたいして、「継続戦争」に関する記述の方は、それ以上の問題をはらんでいるといえるであろう。ここでもポフリョプキンは、たしかに、「フィンランドが敗北した冬戦争の結末によっても、国の指導者は対ソ連政策を深刻に再検討することがなかった」<sup>11)</sup>として、フィンランドにたいする批判の基調は変えていないが、全般的に目立つのは、ソ連・フィンランド両者間の相互不信の強調である。フィンランドがソ連にたいし表面の友好と裏面の敵意をもっていたという従来同様の指摘にしても、ソ連側がそのように受けとった、という表現になっている<sup>12)</sup>。ポフリョプキンは、もとより、両国間の相互不信がフィンランド側の態度によって醸成されたものだ、とはしている。しかし、つぎの文面は、ソ連政府側についても対フィンランド政策の誤まりを認めるという、注目すべき内容を含んでいる。「とくに1940-1941年に特有な、フィンランド・ソ連関係を支配した相互不信の状態は、何ら改善されず、日ごとに悪化した。それは、フィンランドばかりでなく、ソ連をもまた、情勢の評価と解決の選択にあたって弾力的な態度をとることを妨げたほどの、本質的な要因であることを示した」<sup>13)</sup>（圏点——百瀬）。注目される記述はこればかりではない。ポフリョプキンは、ポポーフと同様に、「継続戦争」の前史において「フィンランドの進歩的な左翼がフィンランド・ソ連間の善隣関係を強化するため広汎な大衆運動をつくろうと企てた」として、フィンランド国内の対ソ友好運動をとりあげているが、両者の類似はここで終る。なぜならばポフリョプキンは、そのすぐあとで「企ては関係の緊張緩和には導かず、逆にフィンランドの支配層——ブルジョワジー——の側に、ソ連の意図にたいする不信を喚び起して、尖鋭化に導いた」<sup>14)</sup>として、SNSの運動がかえってフィンランド側の疑惑を増大させたかのような指摘を行なっているからである。

ところで、このように多くの叙述上の問題をはらむポフリョプキンの著作は、1975年になると、ロシア語に復元されたかたちで、『ソ連-フィンランド。260年間の関係1713-1973年』なる題名のもとに、ソ連で出版された<sup>15)</sup>。その内容は全般的にはさきのフィンランド語版のものと変らないが、一部に修正が施されており、しかもそれがもつ意味は無視できないように思われる。上述の該当部分についてみると、「冬戦争」の背景の叙述は、とくに変えられた形跡はない<sup>16)</sup>。しかし、「継続戦争」の背景の叙述は、一部に手直しがなされており、そこには如上で注目すべき記述とした箇所がいずれも含まれているのである。すなわち、さきに引用した、両国の相互不信が日ごとに悪化した、という部分では、それにつづくソ連が弾力的な態度をとることも妨げたむねの文——引用にあたり圏点を附した——は、「情勢は、それだけで、関係正常化を妨げる基本的な要因であることが判明した」<sup>17)</sup>という当りさわりのない文によって置きかえられている。また、対ソ友好運動に言及した部分では、これも如上に引用した部分であるが、「企ては関係の緊張緩和には導

11) *Idem*, s. 316.

12) *Idem*, s. 319.

13) *Idem*, s. 318.

14) *Idem*, s. 317.

15) В. В. Похлебкин, СССР-Финляндия: 260 лет отношений 1713-1973 (Москва, 1975).

16) Там же, стр. 296.

17) Там же, стр. 305.

かず、逆に「フィンランドの支配層——ブルジョワジー——の側に、ソ連の意図にたいする不信を喚び起して「尖鋭化に導いた」という文中の枠で囲んだ部分が落されている<sup>18)</sup>。以上のほかにも、「冬戦争」の講和条約にはしるされていないペッツアモにたいする要求が、対独監視上必要となったことを説明した部分<sup>19)</sup>、スカンジナビア三国との同盟というフィンランド政府の企図にソヴェト政府が反対した事情について「このソヴェト政府の強硬な見解は、明らかにスカンジナビアの右翼新聞がフィンランドにたいする同情を表明した際の言明の影響で、スターリンとモロドフの胸中に生じたものである」<sup>20)</sup>と書いたくだりが、ロシア語版からは消えている。これらの消去や訂正は、いずれも、ソ連の対フィンランド政策の誤まり、ないしは誤まりの印象を消そうとする試みと無関係ではないように筆者には思われる。もっとも、これらの修正はあるにせよ、このロシア語版の方も、「継続戦争」の原因を両国の相互不信の中に求めようとするポフリョプキンの意図をあらわしている点には、変りはない。

ところで、ポフリョプキンの著書のロシア語版が出版された翌年の1976年に、同じくソ連で、バルテーニェフとコミッサロフの共著になる『善隣の30年。ソ連・フィンランド関係の歴史に寄せて』なる書物<sup>21)</sup>が刊行された。この書物は、ポフリョプキンの著書と比べると詳細な文献注をつけた学術書的な色彩をもったものであるが、本稿と関連する部分を見ると、ポフリョプキンが強調したような相互不信への注目は後景に退き、フィンランド側にたいする批判が学問的な体裁の中に前面に押しだされているように思われる。「冬戦争」の背景については、従来のソ連の論者と同様にソ連の要求にたいするフィンランド政府の拒否的な態度を描写したのち、「不遜な外交行動と政治的言動にかぎらず、フィンランド政府は一連の軍事的措置の実行にとりかかった」<sup>22)</sup>として、国境へのフィンランド軍の配備について述べ、ついでソヴェト政府による「成熟しつつあった紛争」の平和手段による調整の企て（国境よりのフィンランド軍の撤退）の失敗→ソヴェト政府による不侵略条約の廃棄通告→フィンランド側からの新たな奇襲に備えようというソヴェト政府の最高司令部にたいする命令→両国間の軍事紛争の勃発、という順序で事態の進行を説明している。ただし国境砲撃事件にたいする言及はない<sup>23)</sup>。この記述は、史実の点でポフリョプキンの記述と変るところがない一方、ソ連外交の自己弁護的色彩は姿を消し、正当化の論調が目立っている。

こうした論調は「継続戦争」前史の説明では、のちにみるフィンランド側での新証言に依拠することによって、一層強まっている。バルテーニェフ-コミッサロフは、まず、「1940年の講和条約は、戦争によって中断されたソ連とフィンランド間の政治経済関係の再建および平和信頼と善隣の途にそった両国間の関係の発展のために好条件をつくりだした。しかし、フィンランドの支配層は、今度もまた歴史の教訓を省みなかった」<sup>24)</sup>とまえ

18) Там же, стр. 304.

19) フィンランド語版では319ページ、ロシア語版では305ページ。

20) フィンランド語版では320ページ、ロシア語版では306ページ。

21) Т. Баргеньев и Ю. Комиссаров, Тридцать лет добрососедства. К истории советско-финляндских отношений (Москва, 1976).

22) Там же, стр. 40.

23) Там же, стр. 41.

24) Там же, стр. 43.

おきしたうえで、フィンランドの内政に関して、「すでに講和調印後の最初の数カ月に、右翼の政治家であり前フィンランド銀行総裁である R. リュティによって指導された政府は、ソ連との関係正常化に踏みだした者達に何よりも打撃を加えることによって、反対派左翼分子を抑圧するコースをえらんだ。……同時に、政府は、反ソ、親ファシスト的組織の活発化を鼓舞した」<sup>25)</sup>と述べる一方、フィンランドの対外政策については、「極秘裡にフィンランド政府はヒトラー・ドイツの軍事的政治的同盟の準備を始めた」として、ドイツ軍のフィンランド領通過権の承認を挙げ、また「フィンランド政府は、一貫して、意識的に、フィンランドがヒトラー・ドイツの対ソ攻撃の共犯者、『バルバロッサ計画』の実行者の一人となるにいたる進路をしいたのである」<sup>26)</sup>と断言している。そして、かれらのこうした断定の根拠であり、またバルテニェフ・コミッサールロフの著述の特色でもある次の議論に進むのである。「ここで、フィンランドの多くの歴史家のあいだに長期にわたって、A. Korhonen 教授によって押しだされたいわゆる『流木』理論が影響を与えていたことを語るのがふさわしい。この理論によれば、フィンランドの政治・軍事指導者は、41年6月の初めにいたるまで、ドイツの対ソ攻撃が準備されていることを知らず、この攻撃の準備に参加しなかったのであり、フィンランドは自己の意思とは別に、あたかも対ソ戦争に引き入れられたのであった」<sup>27)</sup>「この説にたいする重大な打撃は、著名なフィンランド科学アカデミー会員 K. ヴィルクナが加えた。かれは、かれの管理下にある文書を引用して、すでに1940年12月20日、つまりヒトラーによる〔バルバロッサ〕計画の裁可の直後、ドイツのソ連攻撃の半年前、『バルバロッサ計画』についてマンネルヘイムが知らされていたことを、開陳した。この報道は、当時ベルリンにいたフィンランドの将軍 P. タルヴェラをつうじて、マンネルヘイムに伝えられた。遺憾ながらヴィルクナ会員は、タルヴェラの遺書が反対しているために、嘗て同将軍から送られたこの問題に関するタルヴェラの覚書を公表することができない」<sup>28)</sup>。ここに言及されているヴィルクナの証言の意味するところについては後日稿を改めて論じなければならないが、「継続戦争」の背景にかかわる重要な史料であることは間違いない。ただし、それは、1941年12月18日に指令されたバルバロッサ計画をフィンランド側がどの程度知ってナチス・ドイツの対ソ戦争に巻きこまれていったか、という問題と関連しているのであって、それ以前のフィンランドの対外政策の評価にまでかかわるものではない。従って、ポフリョプキンのフィンランド語版著書が認めたようなソ連側の失策は、それがバルバロッサ計画制定以前におかされたものであって、むしろフィンランドの対独協力の背景的因子と考えられるものである以上、バルテニェフ・コミッサールロフのこの論述によっては否定されたことにならないであろう。

フィンランドに関する概観的な出版物、ないしはソ連とフィンランドの関係を論じた出版物で現在のところ主だったものは以上につきるので\*、つぎに、国際政治史、ソ連外交史、第二次大戦史などの国際関係の歴史を扱った、今一つの系統の文献に見出される、「継続

25) Там же.

26) Там же, стр. 44.

27) Там же, стр. 44.

28) Там же.



戦争」ないしは当時のフィンランドの評価・位置づけをみることにしよう。

しかし、これらの類いの文献もさまざまな性格のものが存在しており、それらを網羅的に検討して整理する余裕は目下の筆者にはない。そこで、さしあたり、1960年代はじめに刊行された『ソ連大祖国戦争史』<sup>29)</sup>、1975年に刊行された『外交史』第4巻<sup>30)</sup>、およびこれも1970年代に刊行されつつある『第二次世界大戦史』<sup>31)</sup>の叙述をとりあげて、若干の考察を試みることにしよう。これらは、いずれも国家的な規模で行なわれている共同作業であって、ソ連の学界の全体的動向と方向づけを把握するにはもっとも適当と思われるからである。

まず、『ソ連大祖国戦争史』の記述からはじめることにする。この戦史の中で「継続戦争」の問題がまとめて扱われているのは、第5巻の中の「カレリア地峡と南カレリアにおけるソヴェト軍部隊の攻撃」と題する章<sup>32)</sup>においてである。この章では、主として1944年初頭からの時期が扱われ、とくに同年6月に始まるカレリア戦線でのソ連軍の攻勢と、9月の休戦にいたる政治情勢が述べられているのであるが、その第4節の表題が「戦争からのフィンランドの離脱」となっている点が注目される。これは、他の対ソ交戦国、たとえばルーマニアがソ連軍によって「解放」されたのにたいし、フィンランドはソ連軍に占領されることなく休戦を実現した、という事実を示唆していると思われるが、さらにフィンランドのファシズム陣営にたいするかかわり方の評価をも意味していると考えられる。この表現は、すでに1959年に刊行されたB. Д. イスラエリャンの『大祖国戦争外交史』<sup>33)</sup>中に見られるのであって、そこでは、ルーマニア、ブルガリア、ハンガリーについては「ファシスト・ブロックからの離脱」(Выход из фашистского блока)という節がたてられているのにたいし、フィンランドについてはたんに「戦争からの離脱」(Выход из бойны)とされているのである。さて、『ソ連大祖国戦争史』は、1944年のカレリア戦線でのソ連軍の攻勢は、白ロシアで準備中の対独主要攻勢の陽動作戦的な意味をもち<sup>34)</sup>、その目的は「フィンランドとの国境を回復し、フィンランドを戦争から離脱させる」ことに限定されていたことを明らかにしている<sup>35)</sup>。ソ連側は犠牲を避けて早急に休戦を実現し、同戦線に当てられていた自国軍を対独戦争にさし向けるといふ、「合理的な」意図をもっていたからである<sup>36)</sup>。このように計画された対フィンランド攻勢は、6月21日に開始され、7月11日には、「最高総司令部大本營の指令にもとづいて、レニングラード方面軍部隊は、防御に転じた」<sup>37)</sup>。

29) История Великой Отечественной войны Советского Союза 1941-1945. Военное издательство министерства обороны Союза СССР, Москва. 以下、ИБОВСС と略称する。引用にあたっては、川内唯彦訳『第二次世界大戦史』(弘文堂)を参照した。

30) История дипломатии, том IV: Дипломатия в годы второй мировой войны (Москва, 1975).

31) История второй мировой войны 1939-1945. Военное издательство министерства обороны Союза СССР, Москва. 以下、ИВМВ と略称する。

32) 邦訳は、第7巻。

33) В. Л. Исраэлян, Дипломатическая история Великой Отечественной войны 1941-1945 гг. (Москва, 1959).

34) 邦訳, 160 ページ。

35) 邦訳, 165 ページ。

36) 邦訳, 162 ページ。

37) 邦訳, 173 ページ。

ところで、こうしたソ連軍の成功は、「戦争からのフィンランドの離脱をはやめる条件をつくりだした」。これよりさき1944年春に、フィンランド政府は、年初のドイツ「北」集団軍の敗北と国内の戦争への不満に押されてソ連との休戦の可能性を考えるにいたったが、ソ連側が「きわめてひかえ目な」予備条件を出した<sup>38)</sup>にもかかわらず、これに同意せず、さらにソ連側が「寛容な態度」を示してフィンランド政府代表との交渉に応じたにもかかわらず、結局条件を拒否した。このフィンランド政府の拒否回答には、「ファシスト・ドイツ側からの圧力がすくなからぬ意味をもった」のであって、ドイツ軍の取扱いに関するソ連の要求がフィンランドの「民族的自主性」をおびやかすという理由づけは「偽善的」であった<sup>39)</sup>。この結果、6月攻勢が開始されたわけであるが、そうした中でフィンランド国内では戦争からの離脱を要求する政治的潮流が高まり、苦況に陥ったリュティは「対独同盟を救うために下野することにきめ」た<sup>40)</sup>。後任の大統領マンネルヘイムのもとでは、内政上の事態は「変りばえはしなかった」のであり<sup>41)</sup>、ソ連軍によるバルト海南岸地方での8月攻勢ののち、「フィンランドの支配層は、広範な住民層におされて」、ソ連との休戦交渉の再開に踏みきったのである。以上のように、『ソ連大祖国戦争史』は、一方では1944年6月の攻勢が限定目的をもっていただことを明らかにするという貢献をなす<sup>42)</sup>とともに、他方ではソ連政府の休戦条件をつとめて「寛大」に印象づけるために、正確さを欠いた歴史記述をなしている。

つぎに、『外交史』第4巻の検討に移ろう。『外交史』は、休戦にいたるフィンランドの道程を、1944年4月の「和平のさぐり」と6月攻勢にはじまる動きとの二つに分け、別々の箇所であらわしている。4月の和平探針の方は、1943年8月の33名によるリュティ大統領への和平請願に簡単に触れてのち、1944年2月、フィンランド政府がソ連との直接交渉に踏切ったとして、以後の経過の記述に入っている<sup>43)</sup>。2月にソ連側が示した和平条件についてパーシキヴィが「意外に柔軟」という評言をもらしたことが紹介され、ついで3月のモスクワ訪問から帰国したパーシキヴィが条件受諾を主張したにもかかわらず内閣の支持をえられなかったことが記されているが、その原因はソ連側提案の「不可能さ」ではなくて「リュティ-リンコミエス政府」が望まなかったからである、とし、結局同政府の和平探針の目的は国内の反戦派の活動を無力化する狙いをもっていたにすぎない、と論じている<sup>44)</sup>。『外交史』もまた、フィンランド政府の態度に決定的な影響力をもっていたのは、ベルリンの圧力であった、としている。しかし、その圧力の例証としては、ソ連のフィン

38) 邦訳、162ページ。同戦争は休戦予備条件の一つとして「フィンランド領土内にあるドイツ・ファシスト軍部隊を抑留し、あるいは駆逐すること」を挙げているが、これは正確ではない（本論文I、109-110ページ参照）。

39) 邦訳、163ページ。この言明の論拠として同戦争史が挙げるドイツ側の軍事資材、食糧供給の制限措置は、4月中旬にとられているが、4月2日すでに、フィンランド側では、ドイツ軍の取扱いと6億ドルにのぼる賠償が過大にすぎるといふ見解に達している（本稿I、110-111ページ）。従って、本文中の戦争史の言明は、正確でない。

40) 邦訳、181ページ。これも事実とは逆の描写であるといわざるをえない（本稿I、111-112ページ）。

41) これもマンネルヘイムの登場が和平実現の使命をおびたものである点に目をつぶっている（本稿I、112ページ）。

42) この点については、フィンランド側諸史料と相補的な関係に立っている（本稿I、112ページ）。

43) История дипломатии, стр. 428.

44) Там же, стр. 430.

ランド処理の苛酷さに関するドイツ側の警告、またもしフィンランドが単独講和を結ぶならば占領するという威嚇が挙げられている<sup>45)</sup>。『外交史』も『ソ連大祖国戦争史』と同じ主張に立ってはいるが、後者ほど断定的ではなく、不正確さも免れているといえるであろう。

ところが『外交史』は、6月攻勢以降の叙述の部分になると、『ソ連大祖国戦争史』のそれと大きくかけ離れてくる。『外交史』には、後者が明らかにしたような6月攻勢の目的限定性については触れるところがないが、リュティの単独不講和署名については、きわめて興味深い叙述が見られる。リュティの動機を説明するにあたって『外交史』の著者は、マンネルヘイムの回顧録中から、この行為が、ドイツからの武器と食糧の供給にたいするフィンランドの関心に発したものであり、「負け戦さの持続のためではなく、和平交渉への最上の前提をつくり出すため」のもので、従って議会にはかることなしに、「風変わりなかたち」がえられたのであるという説明を引用している。そして、「フィンランドの指導者たちがドイツの要求を満足させることにしたのは、本質的には、ドイツの軍事情勢が絶望的なことは明らかであると悟り、ファシスト『帝国』<sup>ライヒ</sup>の崩壊、また同時に戦争の終結が、フィンランドが戦場と化してフィンランド政府が和議を強制される以前に、到来することを期待したがゆえであった<sup>46)</sup>と述べているのである。『外交史』の執筆者は、フィンランド政府が結局、こうした目的をもったリュティの対独言明を活用できなかった、すなわちドイツから武器の援助を思うようにえられなかったという指摘によって以上のリュティの行為を批判しているのではある<sup>47)</sup>が、『ソ連大祖国戦争史』とは、反対方向の認識を示していることは否定できない。

最後に『第二次世界大戦史』をとりあげることにする。このシリーズにおいては、筆者が入手しているのは、いまのところ1977年に出版された第8巻までであり、その中の「ファシスト諸国の対外政策の危機の深化」という一節の中で、1944年春のフィンランドの和平探針がひとまとめに扱われている状態にすぎない。そこでの問題の扱い方は、基本的には『ソ連大祖国戦争史』や『外交史』と異なるものではないが、とくにドイツの圧力がクローズ・アップして論じられている。その中でも、「マンネルヘイムや他のフィンランド国政担当者は、かれらが行なった平和探針は国内的判断によるものであり、反戦的な反対派を無力化し、モスクワとの和平は不可能であることを証拠だてるための努力であるとナチス側に説明した<sup>48)</sup>という叙述は注目されるが、これがマンネルヘイムらの真意だとも述べておらず、むしろいかにフィンランド側がドイツの権力に束縛されていたかを立証しようとしたものであろう。全体として、慎重であるだけに新味もない叙述になっている。しかし、うえに述べたように、さらに重要な6月攻勢以降を扱った巻が未検討である以上全体的な評言は控えなければならない。

以上、「継続戦争」期のフィンランドの対ソ関係を中心としたソ連側文献の叙述を検討してきたが、大きな傾向として、フィンランドにたいする抽象的な断罪的論調から、より

45) Там же, стр. 430-431.

46) Там же, стр. 473.

47) Там же, стр. 475.

48) ИВМВ, VIII, стр. 452.

## 第二次大戦中のソ連のフィンランド政策

具体的な説明論調に近くなっており、かつ個々の事実の評価については、小稿でこれ迄検討したフィンランド側を主とする諸史料の語るところと極端には矛盾しなくなっているということが、否定できないように思われる。一方、フィンランド側においても、バルテューネフ-コミッサールロフが指摘するような新証言が現われてきているのである。「継続戦争」の原因や戦争目的、ならびに和平工作の解明は、戦争責任裁判をはじめとするフィンランドの戦後史の諸問題の評価にあたって大きな意味をもつことになるが、筆者の作業がそのような役割を果たすためには、本稿に関し、さらに後日の改訂を期さなければならないと考えている。

\* このことは、ソ連におけるフィンランド関係主要出版物の解説書 А. П. Раскин, Финляндия. Рекомендательный указатель литературы (Москва, 1978) によっても明らかである。

## Soviet Policy toward Finland during the Continuation War

Hiroshi MOMOSE

Finland is known for her special position in international relations since the Second World War. While other western neighbors of the Soviet Union formed a socialist bloc together with the Soviet Union under the rule of communist parties, Finland suffered no change of the regime, and has maintained the position of small state neutrality. The period between the truce of the Continuation War in 1944 and the conclusion of the treaty of friendship, cooperation and assistance in 1948 may be regarded as an important period, in which Finland's particular relations with the Soviet Union took shape. The present writer intends to shed light on this origin of the post-war Finno-Soviet relations in three different articles. The first one, on which the present article falls, deals with the background to the post-war development, or events leading to the truce of 1944. The second will discuss the Finnish post-war politics, which centered round the "problem of war crime." The third will be an article on the conclusion of the treaty of 1948.

The present article consists of three chapters. The first chapter, which was published in No. 20 of *Slavic Studies*, gave an outline of the Finnish foreign relations during the Continuation War. The second chapter, which appeared in No. 21 of the same periodical, coped with the internal affairs of the wartime Finland embellished with the activities of Peace Opposition. The writer was tended to an observation that the Soviet war aims toward Finland, essentially motivated by the consideration of national security, have apparently been limited particularly in view of such factors as the steady internal support the Finnish political system enjoyed, or possible Swedish reaction to the total defeat and consequent Soviet occupation of Finland. In the present, and conclusive chapter, the writer discusses the Soviet literature of the Continuation War, with a remark that there have appeared certain revised views with respect to the background of the war, as well as the last phase of wartime diplomacy.